

## 賢治童話「ひかりの素足」論

### —死生觀を中心に—

顧錦芬/ Ku, Chin-Fen

淡江大学日本語文學系 講師

Department of Japanese, Tamkang University

#### 【摘要】

在宮澤賢治の童話代表作裡，有許多跨越生死界線的描寫，在賢治童話研究範疇，生死觀的探討乃不可忽視的面向。論者咸認內含「銀河鐵道之夜」原始素材的「光之裸足」甚且直接描寫到類地獄景象，生死兩界之間的往還等等。本文擬藉由探討「光之裸足」此核心意象所象徵的意義來究明此文本的生死觀。

#### 【關鍵詞】

「光之裸足」、生死觀

#### 【Abstract】

As is known to everyone, in many famous works of Kenji Miyazawa's fairy tales, there is no borderline whatsoever between life and death and the hero can freely pass through the boundary.

In general, the subject of death is rarely treated in fairy tales, yet indications about death are often seen in Kenji's works. Among them, Bare Foot of Light has vivid descriptions of the after-world and the hell, which is so extraordinary. Specifically, in Bare Foot of Light, the after-world of Naraotto and Ichiro's near death experience can be explored beyond the genre of juvenile literature, to which fairy tales belong.

#### 【Keywords】

Bare Foot of Light, Death- and- Life Issue

## 一、「ひかりの素足」の成立と性格

賢治研究においては、その中の死生観が無視できない大きな比重を占めている部分であるというような論旨はすでに別稿<sup>1</sup>で述べたが、賢治童話で最も直接的で端的に死生観を見ることができるのが「ひかりの素足」なのではないかと思う。というのは、テキスト中に現れる瀕死体験やあの世の描写や他界への往還などが露に表現されているからである。

「ひかりの素足」の成立時期は大正 10 年から 12 年頃までで、草稿の第一形態の清書後、トシの死（大正 11 年 11 月）を体験して、推敲、原稿用紙の差し替えがなされたと推定される<sup>2</sup>。「銀河鉄道の夜」の先駆的な作品であることは諸家<sup>3</sup>の指摘するところである。

テーマにある「ひかり」と「素足」という語彙の設定自体が仏教的であることは、まず『法華経』の序品を参照すれば分かる。例えば「放眉間白毫相光 照東方 万八千世界 靡不周遍 下至阿鼻地獄 上至阿迦尼吒天」（仏は眉間白毫相より光を放ちて東方万八千の世界を照らしたもうに、周遍せざることなく、下は阿鼻地獄に至り、上は阿迦尼吒天に至る）<sup>4</sup>や「各禮佛足」（各、仏足を礼

---

<sup>1</sup> 顧錦芬「宮沢賢治の書簡に見る死生観と生死観」、『淡江日本論叢』第21輯、淡江大学外国語文學院日本語文學系、2010年6月30日、P31～53。

<sup>2</sup> 杉浦静「ひかりの素足」『宮沢賢治の全童話を読む』、学燈社、2008年3月、P148。

<sup>3</sup> 分銅惇作——「後に、「銀河鉄道の夜」の幻想四次元の世界に発展していく過程には、複雑な諸要因が絡みあっているが、「ひかりの素足」はその原型的な位相を示している」（『国文学解釈と鑑賞』、至文堂、1984年11月号、P80）。

田口昭典『賢治童話の生と死』（洋々社、1987年6月、P208）と松田司郎『宮沢賢治の童話論』（国土社、1987年12月、P56）にも似た見解をみることができる。

天沢退二郎——「愛するものと死の国へ入りこんで、一人だけ戻ってくるというこの物語の設定は『銀河鉄道の夜』の先駆をなし、」（『注文の多い料理店』解説、新潮社、1990年、P347）。

中村稔——「「ひかりの素足」はたしかに、「銀河鉄道の夜」の素材のひとつと考えてさしつかえないであろう。」（『宮沢賢治』、筑摩書房、1996年5月、P140、141）。

内田寛「ひかりの素足」は異界への往還という物語構造を持つ点で「銀河鉄道の夜」の先駆的作品とみることができる。」（『宮沢賢治「銀河鉄道の夜」の物語構造』、文芸社、2001年12月、P43）。

<sup>4</sup> 坂本幸男 岩本裕訳注『法華経（上）』、岩波書店、2000年6月、P18。

因みに浄土思想にも「阿弥陀仏も〈不可思議な光が満ちた如来〉としている。極言すれば、極楽

し)<sup>5</sup>とある。他に間接的に関連付けられる「修行のために諸国を歩きまわる行脚」、「禅家で、足もとに気をつけよの意。自己反省、または日常生活の直視を促す語である脚下照顧」、「釈迦の足跡を石に刻み信仰の対象としたものである仏足石」なども参考になろう。

またその内容も仏教的である。「ひかりの素足」の草稿綴には、洋紙表紙が付され、中央にブルーブラックインクで題名が書かれ、その右側に赤インクで「凝集を要す 恐らくは不可」、題名左側に同じく赤インクで「余りにセンチメンタル 迎意的<sup>6</sup>なり」という賢治自筆の書込みがある。<sup>7</sup>

「凝集を要す」からは、まだまだ手入れをしたいという意欲が、「恐らくは不可」からは、賢治自身にとって「ひかりの素足」は文学の自信作ではないことが読み取れよう。確かに、実際「ひかりの素足」作品自体は童話か仏教説話が判断しがたく、恐らく賢治の中の宗教性が文学性に勝った故の所産であろう。

ところが、原稿の推敲は九度にわたって行われ、初期形さえ複数ある「銀河鉄道の夜」を除いて、他の代表作<sup>8</sup>よりも頻繁であることは賢治の書かざるを

---

浄土も阿弥陀仏もただ「無限の光」そのものなのである。その存在に目覚めて信仰することより、自らの内に「無限の光」が惜しみなく降り注がれると、そこには、自覚的な浄土が出現するのである。」がある。——増田秀光編『浄土の本』Books Esoterica 第7号、学習研究社、1993年8月、P154。

<sup>5</sup> 前掲書、P16。更に、付け加えて説明すると、次のような説がある。

仏足頂礼というのは、仏様の足を自分の手の上に乗せて、自分は仏様の足の下にひれ伏して総てを頂くのです。また、自分の中の仏性に礼拝すると言う意味もありますが、仏教ではどの宗派でも行われている最も重要な礼拝です。（「禅と健康」講話 桐山 紘一）  
<http://www.ngn.janis.or.jp/~kiriko/essai/kenko0301.html>（2011年2月25日検索）

<sup>6</sup> 「迎意的」は辞書にはなく、内田寛の「迎意的とは読者の感興をあからさまにある方向へ持っていくこととすることであろう。」（『宮沢賢治「銀河鉄道の夜」の物語構造』、文芸社、2001年12月、P44）や

田口昭典の「法華経の章句がそのままの形で出ていること、賢治がかつて経験した、如来寿量品との出会いが、あまりにもなまの形で出ている」（『賢治童話の生と死』、洋々社、1987年、P202）という解釈を参照。

<sup>7</sup> 『新校本宮沢賢治全集 第八巻 童話Ⅰ 校異篇』、筑摩書房、1995年、P117。

<sup>8</sup> 例えば、「セロ弾きのゴーシュ」6次、「夜鷹の星」2次、「なめとこ山の熊」1次。

得ない執着と完璧を期する心情を示すものといえよう。

背景としては、内田朝雄による、「東京から花巻へ帰ったトシの影響を受容する賢治に異文化接触動揺の結果として、自分の信仰の確かめ」だという指摘<sup>9</sup>やトシのいった世界の想像などが考えられよう。

さらに、宗教的要素の他に、賢治の心象風景も加えて検討してみると、例えば心象スケッチとしての『春と修羅』にも、〈ひかり〉、〈素足〉という言葉が出ており、「ひかりの素足」作品中の風景を想起させる内容もあることが分かる。例えば「小岩井農場」パート四には

すきとほるものが一列わたくしのあとからくる  
ひかり かすれ またうたふやうに小さな胸を張り  
またほのぼのとかゞやいてわらふ  
みんなすあしのこどもらだ

とあり、パート九には

ユリア ペムペル わたくしの遠いともだちよ  
わたくしはずゐぶんしばらくぶりで  
きみたちの巨きなまつ白なすあしを見た  
どんなにわたくしはきみたちの昔の足あとを  
白堊系の頁岩の古い海岸にもとめただらう

とある。これらは異空間の光りの素足の子供らに会ったり、「巨きなまつ白なすあし」のある「遠いともだち」に「あふことができ」、「血みどろになつて遁げなくてもいい」<sup>10</sup>というように救済されたりするような心象である。

また、「青森挽歌」にも

そこに碧い寂かな湖水の面をのぞみ  
あまりにもそのたひらかさとかがやきと  
未知な全反射の方法と

---

<sup>9</sup> 内田朝雄「書簡に見る賢治の青春後期」『国文学解釈と鑑賞』、至文堂、1996年11月、P27。

<sup>10</sup> 同じ「小岩井農場」パート九の文。

さめざめとひかりゆすれる樹の列を  
ただしくうつすことをあやしみ  
やがてはそれがおのづから研かれた  
天の瑠璃の地面と知つてこゝろわななき  
紐になつてながれるそらの楽音  
また瓔珞やあやしいすものをつけ  
移らずしかもしづかにゆききする  
巨きなすあしの生物たち

とある。これはトシのいった世界の想像で、ここにも「ひかりの素足」における浄土を想起させる風景と、神聖なる存在としての「巨きなすあし」の生物たちがいる。

『春と修羅』の創作時期（大正11年～12年）と「ひかりの素足」（大正10年～12年）のとは近くて、その前後関係が判断しがたいが、〈ひかり〉、〈素足〉という言葉や、「ひかりの素足」における異空間の風景は、賢治が「ひかりの素足」を創作するために考え出した表現ではなく、すでに心象風景にあるものを生かして表現したものであろう。賢治の詩はそんな心象風景をスケッチした作品であれば、「ひかりの素足」は賢治の心象に実在する異空間（死後世界、天上、幻想）と人間界（現実）の二重風景を童話化した作品だといえよう。

ところで、賢治童話は大人の文学と児童文学のどちらにも分類できない、両領域に跨る「両域文学」<sup>11</sup>と見られ、「ひかりの素足」のような童話こそ、このような賢治童話の性格を端的に示した作品だと思われる。というのは、「ひかりの素足」は全知視点で語られているが、地の文などからは、大人の視点というよりも子供の視点によるものだ<sup>12</sup>ととらえられながら、一方では、子供の

---

<sup>11</sup> 顧錦芬「童話試論—宮沢賢治の場合」（『淡江人文社会科学刊第31期』、淡江大学出版、2007年9月）を参照。

<sup>12</sup> 例えば「二、峠」における「お父さんは小屋の入口で馬を引いて炭をおろしに來た人と話してゐました。ずゐぶん永いこと話してゐました。」と「自分たちの方の馬の歩き出すのを待ってゐましたがあまり待ち遠しかった」など天沢退二郎のいう「子どもにとってひとつの夢魔である」大人たちの長話（「峠を登る者」『ユリイカ』1977年8月号、青土社、P51）或いは、「光の素足」をもつ「その巨きな人」が見せた、子どもたちが「よろこびの声をあげるばかり」と

死や子供たちが直面する過酷な試練と、その神秘的で宗教的な内容、特に地獄と思しき世界の描写などは子供向きとは言いがたい様相を呈しているからである。

また、中野新治が「賢治が童話という形式を選んだこと自体、その死生観の現われであった」<sup>13</sup>と指摘する通り、賢治が人間界しか描けない小説などではなく、童話という形式を選んだのは、上記の死後世界や心象にある異空間をも表現しようとしたからであろう。

従って、「ひかりの素足」の場合における「両域」とは、大人の文学と児童文学という両領域だけでなく、生と死の両領域をも意味するといえるのではないと思われる。

一方、宗左近は賢治文学の中心について

〈死〉と〈生〉の二つに分裂しながらも、〈死〉と〈生〉の二つが同時に共存している世界、それが賢治の舞台です。そういう、舞台としての〈中有〉、それを描くことに賢治の文学の中心はあった。<sup>14</sup>

と的確に指摘しているが、「ひかりの素足」は、正にそのような中心的な作品なのである。

以下、この、賢治文学の両域性を端的に表し、中有の世界を描く、「賢治の思想と文学の根幹にかかわる本質的な問題点を包みこんでいる」<sup>15</sup>テキストを、死生観を手がかりに探究することとする。

手順としては、まず、一郎兄弟を死の世界へ送ろうとするように見える風の又三郎の正体を確かめる。次に、命にかかわる重大で悲惨な体験をする主人公を、なぜ大人でなく、子供に設定したのかについて探求することによって、「ひかりの素足」における死生観の一側面を浮き彫りにしたい。また、「うすあかりの国」を仏教的な観点からみれば中有であるが、自然科学的な観点からみる

---

というような世界などから判断する。

<sup>13</sup> 中野新治「賢治の死生観」『国文学解釈と教材の研究 特集 宮沢賢治を読むための研究事典』、学燈社、平成元年12月号、P33。

<sup>14</sup> 宗左近『宮沢賢治の謎』、新潮社、1996年3月、P92。

<sup>15</sup> 分銅惇作「「ひかりの素足」―浄土のイメージについて―」『国文学解釈と鑑賞』、至文堂、1984年11月号、P80。

ことで、一郎の瀕死体験と看做す。そして、一郎が浄土と思しき世界に永住できず、この世へ蘇生した意義を探る。最後に「ひかりの素足」というシンボルが何を意味するのかを考察し、「ひかりの素足」に見られる死生観をまとめてみることにする。

## 二、死神としての「風の又三郎」

まず確認しておきたいのはテキストに現れた「風の又三郎」のことである。

「風の又三郎」とは、童話「風の又三郎」の主人公のあだ名でもあるが、もともと「岩手・新潟などで知られる〈風の三郎〉伝説の三郎は、想像上の風の童神であり、複数の宮沢作品では、一貫して又三郎の名で登場する。（中略）「ひかりの素足」では子どもの死を予告する」<sup>16</sup>。

童話「風の又三郎」に現れた赤毛のおかしな子である「風の又三郎」（高田三郎）は人間と神の間にいるような謎の存在であるが、「風の又三郎」が一種の死神であることに関しては、天沢退二郎がすでに『宮沢賢治の彼方へ』<sup>17</sup>で論及しているが、以下詳しく検討してみよう。

「ひかりの素足」に登場した「風の又三郎」は、まず、形のないまま柩夫に死を予告する。例えばテキストには、

「いたゞきにパッとけむりか霧のやうな白いぼんやりしたものがあらはれました。それからしばらくたってフィーとするどい笛のやうな声が聞えて来ました。」（P284）

「お父さんおりゃさ新らしきもの着せるって云ったか。」、

「それがらお母さん、おりゃのごと湯さ入れて洗ふて云ったか。」、

「それがらみんなしておりゃのごと送って行くて云ったか。」（P285）

とある。

それから、

<sup>16</sup> 中村三春「風野又三郎」、『知っ得宮沢賢治の全童話を読む』、学燈社、2008年3月、P42。

<sup>17</sup> 天沢退二郎『宮沢賢治の彼方へ』、思潮社、1989年、P47。——「風の又三郎が、賢治の世界の中で、不吉な死の国の使者——一種の死神でもある」。

「にはかに空のほうでヒィウと鳴って風が来ました。」、「前より一そうひどく風がやって来ました。その音はおそろしい笛のやう、、、、。」、「風がひゅうと鳴って、」(P291)

「風が一そうはげしくなりました。」、「風がまたやって来ました。」、「風がもうまるできちがひのやうに吹いて来ました。」、「樗夫が泣いて云ひました。その声もまるでぎるやうに風が持って行ってしまひました。」(P292)

などとあるように、強い風と化して一郎兄弟をあの世へ送ろうとしたり、「何かうす赤いやうなものがひらひらしながら一目散に走って行く」(P295)とあるように、「うす赤いもの」と化して、一郎の恐怖感を増したりする。

「一、山小屋」では、「風の又三郎」は山小屋へ樗夫にしか聞こえない死の予言をしに来てから、一郎兄弟が「うすあかりの国」に着くまで風に化して一郎兄弟に付き纏う。

「二、峠」では、風が強く吹くことによって、一郎兄弟をあの世へ送ろうとする。

「三、うすあかりの国」では、中有に入ってもまだ風がよく吹き、一郎を怖がらせるし、死んだ樗夫の形を消そうとする。しかも「うすあかりの国」に着く直前に、風という形のない形態だけでなく、更に「うす赤いやうなもの」(童話「風の又三郎」の高田三郎は赤毛のおかしな子)として登場する。

このように、死後の世界に近ければ近いほど、はっきりした形を持たない「風の又三郎」の影が意地悪く現れてくる。

風が吹くことにつれて、だんだん人間を死の世界へ導いていくという上列した箇所を検討した限り、「ひかりの素足」における「風の又三郎」が死神であることが改めて確認できたように思われる。風という自然現象、あるいは民俗信仰を交えた幻想的で謎めいた存在としての風の又三郎と死の関係性が、「ひかりの素足」における死生観の特徴の一つであるといえよう。

ただ、風あるいは風の又三郎が他の賢治童話においても死をあらわしているのか、つまりこれは「ひかりの素足」だけに見られる特徴なのかということは今後の課題としたい。



### 三、なぜ主人公が子どもなのか

次に、死後世界で苛まれ、そのままあの世に残ったり、蘇生したりするのはなぜ大人ではなく、穢れも罪もない子供たちなのかを考えてみたい。

賢治は『注文の多い料理店』の「新刊案内」で、自分の童話の特色の一つとして「必ず心の深部に於て万人の共通である。卑怯な成人達に畢竟不可解な丈である」と書いている。純真な心意を所有しない成人たちは潔さがなく、卑劣であるなら、子どもは潔く、純真無垢だということであろう。そして、「童児こさえる代りに書いたのどもや」などと言って、弟妹などに自分の書いた童話を読んでやり、喜ばせた18という。しかし、子どもを、童話創作並みの重要性を持つ大切な宝物と見る一方で、「ひかりの素足」では、大人ではなく、子供が苦しめられ、死んでいる。つまり、「仏はなぜ、仏と関係を持たず静かに暮らしていた者たちにまで〈罪〉という妙な請求書をつきつけようとするのか。子供たちは、なぜ傷つけられなければならないのか。」<sup>19</sup>という疑問が提出されている。

それは鬼が怒鳴った「罪はこんどばかりではない」「みんなきさまたちの出かしたこった」などからもはっきり分かるように、人間には生まれ変わり、生々流転があり、生まれてくる前からの宿業があるから、子どもにも罪がありうることを表している。つまり、宿業と輪廻の实在を浮き立たせようとする意図があるのではないかと思われる。ただし、人間の罪は「修功德 柔和質直者」が「によらいじゅりゃうぼん」をつぶやくことによって、「この世界を包む大きな徳の力にくらべれば太陽の光とあざみの棘のさきの小さな露のやうなもん」になる。そして、浄土にも行けるのである。

一方、「ひかりの素足」とイメージの重なる「小岩井農場パート四、パート九」における子どもに関する心象を検討してみると、

みんなすあしのこどもらだ  
ちらちら瓔珞もゆれてゐるし、、、  
これらはあるいは天の鼓手 緊那羅のこどもら……  
どのこどもかが笛を吹いてゐる

---

<sup>18</sup> 宮沢清六『兄のトランク』、筑摩書房、1996年4月、P89。

<sup>19</sup> 畑山博『美しき死の日のために—宮沢賢治の死生観』、学習研究社、1995年12月、P40。

それはわたくしにきこえない  
けれどもたしかにふいてゐる

——「小岩井農場」パート四

どこの子どもらですかあの瓔珞をつけた子は……  
あなたがたは赤い瑪瑙の棘でいつばいな野はらも  
その貝殻のやうに白くひかり  
底の平らな巨きなすあしにふむのでせう

——「小岩井農場」パート九

とあるように、天上にある神なる存在としての子供が賢治の心象風景としてあり、しかも「ひかりの素足」の主題にかかわるような情景が表現されている。このような賢治の心象から見れば、「ひかりの素足」の主人公が子供となっていることも自然であろう。

ところで、「みんなひどく傷を受けてゐる。それはおまへたちが自分で自分を傷つけたのだぞ。」「こゝは地面が剣でできてゐる。お前たちはそれで足やからだをやぶる。さうお前たちは思つてゐる、けれどもこの地面はまるっきり平らなのだ。さあご覧。」とあるように、子供たちは地獄と思しき世界での悲惨な体験を経るとはいえ、地面が剣でできていることも、傷も、実はみな自分で自分を傷つけた。これは「各個人にとっての世界はその個人の表象（イメージ）に過ぎない。あらゆる諸存在が個人的に構想された識でしかないのならば、それら諸存在は主観的な虚構であり客観的存在ではない」<sup>20</sup>と主張する唯識思想に通ずるのであろう。しかも樗夫は「その人」が現れてから、「黄金いろのきものを着瓔珞も着けてゐた」し、風の又三郎が伝えた死の予言を感じた時に、怖がって泣いていたのに対して、あの世で一郎と別れる時には「光って立派になって」、この世の死に顔も「かすかに笑つてゐた」と対照的であり、仏に帰依することで死への恐怖が取り除かれたといえよう。

他に、押野武志が指摘した日本の童話における「〈子供の死〉を通して子供時代を凍結し、彼岸に子供のユートピアを見出そうとする傾向」<sup>21</sup>というようにすることも考えられよう。

---

<sup>20</sup> <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%94%AF%E8%AD%98> (2011年2月25日検索)

<sup>21</sup> 押野武志『宮沢賢治の美学』、翰林書房、2000年5月、P158。

賢治童話の代表作では、死んだのが人間であれば、こどもである場合が多い。「ひかりの素足」はもちろんであるが、他にも例えば、「水仙月の四日」で凍死しそうなも子供である。「銀河鉄道の夜」で死んだ子どもは三人いる。「虔十公園林」の主人公である虔十もこどもで、自分の植えた林を観賞することなく死ぬ。

このように、あえて「卑怯な成人達」ではなく、大切な宝物であり、まだ天寿を全うしていない子どもたちが死ぬというのは、人間の死ということ自体が絶望的で、悲慘的というようなマイナスのイメージを持たず、むしろ一種の解脱や昇華や超克であるというプラスの意義を表しているのではないかと思われる。

従って、「子供」の死という設定の原因としては、神聖なる存在としての子供がもともと賢治の心象風景にあること、宿業と輪廻の实在の強調、死ぬこと自体はマイナス的ではなく、一種の解脱であることを表していることなどが考えられよう。そして、子供たちが悲慘な体験をするのも、傷つけられるのも主観的な虚構に過ぎないし、結局は唱題や仏への帰依によって浄土へと救われる、一つの縁に過ぎないのである。

#### 四、 中有・浄土・瀕死体験

さらに、作品中の中有の世界について考えてみる。作品中では雪嵐の中で迷い、一郎は弟の樗夫を抱いたまま岩の下へ座りこんで、「二人とも雪と風で死んでしまふのだと考へて」、意識不明から目覚めたら、死後世界にいた。やっと「蠟燭の火のように光ったり又消えたり」する樗夫に再会できたと思ったら、樗夫は「死んだんだ」とはげしく泣く。その後、樗夫は「前のお母さん」を見ることができ、そのまま残り、一郎は「お母さんの所へ帰」り、蘇生した。このように、「三、うすあかりの国」で描かれた世界は仏教の視点から見れば、人の死後、次の生を受けるまでの間の中有の世界なのである。ここでの劇的な体験もまた中有の旅のようなものである。

その世界で、最初は他の子供たちと一緒に鬼に追い立てられながら、恐ろしい地獄体験をしたが、一郎一人が「によらいじゅりゃうぼん第十六」という語を感じ取り、また「によらいじゅりゃうぼん」と繰り返してつぶやいたお陰で、樗夫をはじめ、子供たち全員が「ひかりの素足」の人に会えて、周りも地獄から浄土のような世界に一変した。

この浄土のイメージについては、分銅惇作が「如来寿量品第十六」にある「我此土安穩 天人常充滿」から始まる世尊のいる国を描く経文によったと指摘する<sup>22</sup>。筆者はその経文の後に続く「是諸罪衆生 以惡業因縁 過阿僧祇劫 不聞三寶名 諸有修功德 柔和質直者 則皆見我身 在此而說法」における下線部分（諸有の、功德を修し 柔和にして質直なる者）<sup>23</sup>にも注目したい。全身全霊で弟を守り通す一郎が「修功德 柔和質直者」だからこそ、「によらいじゅりゃうぼん第十六」という語を感じとることができ、如来の身も見られ（見我身）、更には子供達をも救えたのである。

浄土のイメージを、分銅惇作のような法華經に見る論も、浄土教の經典<sup>24</sup>に見る論もあるが、むしろ和木浩子が綿密な分析を行って、「特定の經典だけに限定されるものではなく、大乘仏典ではしばしば見ることができる浄土の光景で、……賢治が經典から吸収したものは、本文に溶け込んでおり、厳密には指摘しづらい」<sup>25</sup>と帰結しているのが最も穏当なところであろう。

その一方で、「ひかりの素足」の浄土は学校、博物館、図書館、運動場など近代的な施設も備わって、チョコレートまである、子供でも楽しく過ごせそうな「現実性を帯びた理想郷」<sup>26</sup>である。

楢夫と他の子供らはそのまま天人になって浄土に残り、一郎だけが「すなほないゝ子供だ。よくあの棘の野原で弟を棄てなかった」から、「その人」に奨励されるかのように人間として蘇生できた。この世から見れば、一郎は又お母さんに会えて救われたといえるが、あの世から見れば、「今の心持を決して離れるな。お前の国にはこゝから沢山の人たちが行ってゐる。よく探してほんたうの道を習へ」と「その人」に言い渡され、未完の任務を背負うようになった。この論は「極楽に往生（往相回向）したあとに、この世で迷い続ける一般民

<sup>22</sup> 分銅惇作「『ひかりの素足』—浄土のイメージについて—」『国文学解釈と鑑賞』至文堂、1984年11月号、P78。

<sup>23</sup> 坂本幸男 岩本裕訳注『法華經（下）』、岩波書店、2000年4月、P32。

<sup>24</sup> 木村東吉「『ひかりの素足』考—その未定稿の背景」、『国文学解釈と鑑賞』平成21年6月号、至文堂、P131。

<sup>25</sup> 和木浩子、「〈ひかりの素足〉の信仰」、<http://www13.plala.or.jp/monokobo/kenji/writing/kenji-3.html>。  
(2011年2月25日検索)

<sup>26</sup> 黄英『宮沢賢治のユートピア志向—その生成崩壊と再構築』、花書院、2009年2月、P114。

衆を救うために再び戻ってくる（還相回向）」<sup>27</sup>浄土思想を想起させよう。

因みにこの還相回向的な生き方については菊田茂男氏が巨視的な観点から日本文学における死生観を探究する時、「銀河鉄道の夜」からも見出し、次のような見解を示している。

、、、輪廻転生の糸が張りめぐらされている、というモチーフが潜められている。このような生と死のイメージは、宮沢賢治の童話「銀河鉄道の夜」の主人公ジョバンニの、死や別離や孤独という、人生のあらゆる負性を背負いながら、この地上に還り来て、正性としての「ほんたうの幸福」を問いつづける、という「還相回向」的生き方や、「青森挽歌」や「オホーツク挽歌」などの詩篇の内面を彩る、極限としての北方に触れ合うことによって、死の深い悲しみからの救済と再生を告げる「心象スケッチ」の世界にも引き継がれ、生と死と再生のモチーフとして重要な文芸的意味を担うことにもなる。<sup>28</sup>

ジョバンニと一郎、両者の違った点が肉体の瀕死体験の有無にあるが、上述したような輪廻転生や還相回向のような死生観が両作品に見られ、相通じている。

ところで、一郎は雪嵐の中で、意識不明になりかけた時、「いろいろなことがまるでまはり燈籠のやうに見えて来ました。」

そして、「にょらいじゅりゃうぼん」とつぶやいてみたら、「野原のはづれがぼうっと黄金いろになってその中を立派な大きな人がまっすぐにこっちへ歩いて来るのでした。どう云ふわけかみんなはほっとしたやうに思ったのです」。

「立派な大きな人」が現れてから、その「まっ白な足さきが二度ばかり光り」、「一郎はまぶしいやうな気がして顔をあげられませんでした。」、「大きな黄金いろの光が円い輪になってその人の頭のまはりにかゝりました」。

それから、「五、峠」では、樗夫と一郎が別れた場所が「光の国」と表現されている。

---

<sup>27</sup> 増田秀光編『浄土の本』Books Esoterica 第7号、学習研究社、1993年8月、P154。

<sup>28</sup> 菊田茂男「日本文学における生と死の構図—直線的継続の関係性と円環的継続の関係性」、岩田靖夫、塚本啓祥編『人間その生と死』、平楽寺書店、1993年12月、P333。

これらの記述を自然科学的に見れば、瀕死体験の描写にしか見えない。

アメリカの精神科医であるレイモンド・ムーディ (Raymond A. Moody, JR ) が著書の『Life After Life』で次のように瀕死体験の典型をあげる。

What is perhaps the most incredible common element in the accounts I have studied, and is certainly the element which has the most profound effect upon the individual, is the encounter with a very bright light.

Despite the light's unusual manifestation, however, not one person has expressed any doubt whatsoever that it was a being, a being of light. Not only that, it is a personal being. It has a very definite personality. The love and the warmth which emanate from this being to the dying person are utterly beyond words, and he feels completely surrounded by it and taken up in it, completely at ease and accepted in the presence of this being.<sup>29</sup>

そして、ソギャル リンポチェ (Sogyal Rinpoche) も『チベットの生と死の書』で

「光の存在」の前で、人は走馬灯のように過去の人生を回顧し、これまで行なってきた善い行為と悪い行為のすべてを再び見る。<sup>30</sup>

と瀕死体験について言及する。

一郎たちの中有の旅を上述した瀕死体験と照合してみれば、「光」も「生命回顧」も重なる部分であることがわかる。

そして、両著書の中で、神聖なる光が最も強調するのは何よりも愛の重要性であるということも述べられている。弟思いの一郎が樁夫を愛するのはいうまでもなく、更には「両腕であらん限り樁夫をかばひ」、鬼が樁夫に振り上げる鞭を受けるほど自己犠牲的であるから、「ひかりの素足」の「その人」(神聖なる光の生命)にも高く評価されたといえるであろう。

因みに、「ひかりの素足」には父親が山小屋で子供達を見送って以来、救難

---

<sup>29</sup> Raymond A. Moody, JR 『Life After Life』, Bantam Books, Inc, 1986, P58～59。

<sup>30</sup> ソギャル リンポチェ (Sogyal Rinpoche) 『チベットの生と死の書』、大迫正弘、三浦順子訳、講談社、1995年10月、P511。

隊にさえ姿を現していない。その上、不思議なことに、現実の人間界でも一郎兄弟が見つかった時、救援に来た隣りの人や猟師は彼らの両親に知らせようとしないで、直接火を焚くなり、雪に寝させるなりすることを話し合って、遭難現場で樁夫の遺体を処理しようとする。このような父親不在について河合隼雄は「瀕死体験のような深い体験をする場合、父親の不在、あるいは留守ということは、非常によく出てくるテーマです。つまり父親というのは常に現実規範の体现者の面をもってあらわれますから……。」<sup>31</sup>と解釈する。これもまた瀕死体験の一側面の表出であろう。

## 五、「ひかりの素足」とは

つづいて題名の「ひかりの素足」について考えてみたい。まず、手掛かりになる子どもたちの足の変化に注目したいと思う。

その変化のプロセスとは、「靴を履く足」から「裸足」に、そして「裸足」から「傷だらけの足」に、最後に「傷だらけの足」から「ひかりの素足」になるというものである。

「二人の雪査は早くも一寸も埋まりました」や「雪がもう査のかゝと一杯でした」などから、一郎と樁夫は中有に入る前に、靴を確かに履いていたことが分かる。が、「うすあかりの国」に入ってから、一郎の「足ははだしになってゐて…深い傷がついて血がだらだら流れて居りました」というように、「あんまり痛くてバリバリ白く燃えてるやう」な傷だらけのはだしになってしまった。そして、一郎だけではなく、樁夫も「うすあかりの国」では「やっぱりはだしでひどく傷がついて居りました」し、追われている子供たちまでも「みんな一郎のやうに足が傷ついてゐて」で、その中の一人も「あんまり足が痛むと見えてたうたうよろよろつまづきました」という有様であった。

ところが、「ひかりの素足」を持つ「その人」が現れることによって、子供たちは皆悲惨な状況から救われたところまでになり、「みんなのからだの傷はすっかり癒ってゐた」だけでなく、その国の運動場で「かけることを習ふものは火の中でも行くことができる」ようになる。子供達が皆こうして罪が浄化され、浄土にいけるようになったことから、浄土真宗や日蓮宗などで積極的に説いている「一切衆生悉有仏性」の概念が窺えよう。

<sup>31</sup> 河合隼雄「瀕死体験と銀河鉄道」『新文芸読本 宮沢賢治』、河出書房新社、1996年8月、P179。



一郎以外の子供たちは浄土で更に修行をすれば(=その運動場でかけることを習えば)、「ひかりの素足」の「その人」のように「燃えあがる赤い火をふんで少しも傷つかずまた灼け」ないようになることができ、火の中でも行くことができる。

更に、他の子供たちと違って、一郎だけが、既に「足の傷や何かはすっかりなほつていまはまっ白に光り」、「もうはだして悪い剣の林に行くことができる」ようになった。つまり、「鋭い鋭い瑪瑙のかけらをふ」んでも「少しも傷つか」ない「その人」と同じように、一郎まで「ひかりの素足」を持つようになり、他の子供達よりさらに次元の高い境界に達することができている。もし、一郎の「素足」に即して考えれば、具体的な人体の一部である「裸足」が、「傷だらけの痛む裸足」から「ひかりの素足」へと変化した二つの形象は、仏性を引き出される前と後を象徴するかのようであり、あたかも暗号や隠喩のような役割を果たしているように思われる。

一郎と他の子供たちとの間の差異が何かといえ、次のように解析できるのではないと思う。弟を背負ったり、一生懸命庇ったりする一郎自身もまだ子供で、他の子供らと同じように、傷だらけで恐ろしい鬼に追われながらも、「樵夫などに何の悪いことがあってこんなつらい目にあふのかといふことを考へました」。「自分」ではなく、まず「樵夫など」を考えるということからは、中地文が指摘した「一郎が語りの観点を方向づけている」<sup>32</sup>ことのほかに、自分のことよりも他者を優先して考える一郎の気質が読み取れる。つまり、一郎の異質性とは自分を勘定に入れる前に、他者を思いやる品性あるいは精神性にある。

従って、「その人」の「ひかりの素足」が「如来のシンボルであ」<sup>33</sup>るならば、一郎の「ひかりの素足」とは他者を優先して思いやり、弱者を守り通す生き方を貫き、本当の道を求め、仏性を照らし出そうとする意志、つまり菩薩の願行の象徴だと言えよう。

---

<sup>32</sup> 中地文「ひかりの素足― 一郎とは誰か」『国文学解釈と鑑賞』平成12年2月号、P47～48。P47に〈山根知子氏の論文は物語の構造に注目し、「一郎の視点による一郎の瀕死体験」としてこの作品を意味づけた貴重な試みの一つであるといえるだろう〉とも言及する。

<sup>33</sup> 田口昭典『賢治童話の生と死』、洋々社、1987年、P203。



## 六、まとめ

最後に「ひかりの素足」に見る死生観をまとめてみると、次のようになる。「ひかりの素足」のストーリーは、樗夫の死と一郎の蘇生を巡って展開しており、彼らをあの世へ導いていく使者が「風の又三郎」であることが確認できたように思われる。「風の又三郎」が樗夫に感じさせ予告した通り、葬儀の作法は新しいきものを着せ、湯に入れて洗い、みんなで送って行くという葬儀そのものになっているし、風が吹くことによって一郎兄弟をあの世へ送ろうとするのである。風という自然現象や、民俗信仰を交えた幻想的で謎めいた死神のような存在としての風の又三郎と死の関係性が「ひかりの素足」における死生観の特徴の一つであるように思われる。

次に、宿業と輪廻は実在するが、唱題さえすれば、宿業や罪は浄化され、神聖なる浄土に行ける。しかし、浄土とは永遠に安住するところではなく、教化する力を獲得したら、すべての衆生を教化して、一緒に仏道に向かわせようとするため、又この世へ戻るべきという「還相回向」的な生き方が窺える。因みに、このような「還相回向」的な死生観は「銀河鉄道の夜」にも見られるようである。

それから、死んだ主人公を子供に設定したことからは、死ということ自体が決してマイナスのイメージを持たず、むしろ一種の解脱や昇華であることも窺える。

そして、何よりも核心的なのは、一郎が「ひかりの素足」を獲得することで蘇生したことから明らかなように、生成し続ける根元的生命はどの世界にあっても、他者を優先して思いやり、弱者を守り通し、本当の道を求め、仏性を照らし出そうとする意志を貫くことでそれら世界を結びつけるという点である。つまりそうした菩薩の願行が生と死の世界を結び付けているという死生観にあると思われる。

今後の課題としては、「ひかりの素足」と「銀河鉄道の夜」における「還相回向」的な死生観を比較検討したり、風あるいは風の又三郎が他の賢治童話においても死をあらわしているのかを探究したりして、死生観の見られる代表作を分析することによって、賢治童話における死生観をまとめていきたいと思う。

- \* テキストは『新校本宮沢賢治全集』（筑摩書房、1995 年 5 月）による。
- \* 引用の下線はすべて筆者による。

（本論文は 2009 年 12 月 19 日に台灣日本語文学会と淡江大学日本語文学科共催の「2009 年度日本語文学國際學術研討會—日本語教育之活性化」での口頭発表に基づいて加筆改定したものである。）

#### 参考文献(年代順)

##### 日本語図書

- 田口昭典（1987）《賢治童話の生と死》、東京：洋々社。
- 松田司郎（1987）《宮沢賢治の童話論》、東京：国土社。
- 天沢退二郎（1989）《宮沢賢治の彼方へ》、東京：思潮社。
- 宮沢賢治（1990）《注文の多い料理店》東京：新潮社。
- 増田秀光編（1993）《浄土の本》、Books Esoterica 第7号、東京：学習研究社。
- 宮沢賢治（1995）《新校本宮沢賢治全集 第八巻 童話 I 校異篇》、東京：筑摩書房。
- 畑山博（1995）《美しき死の日のために—宮沢賢治の死生観》、東京：学習研究社。
- ソギャル リンポチェ（1995）『チベットの生と死の書』、大迫正弘、三浦順子訳、東京：講談社。
- 山内修（1996）編《新文芸読本 宮沢賢治》、東京：河出書房新社。
- 中村稔（1996）、《宮沢賢治》、東京：筑摩書房。
- 宗左近（1996）、《宮沢賢治の謎》、東京：新潮社。
- 宮沢清六（1996）、《兄のトランク》、東京：筑摩書房。
- 押野武志（2000）、《宮沢賢治の美学》、東京：翰林書房。
- 坂本幸男 岩本裕訳注（2000年）『法華経』、東京：岩波書店。
- 内田寛（2001）《宮沢賢治「銀河鉄道の夜」の物語構造》、東京：文芸社。
- 国文学編集部編（2008）《知っ得宮沢賢治の全童話を読む》、東京：学燈社。
- 黄英（2009）、《宮沢賢治のユートピア志向—その生成崩壊と再構築》、東京：花書院。

##### 日本語雑誌論文

- 天沢退二郎（1977）、〈峠を登る者〉、《ユリイカ》、1977年6, 8, 10月号、東京：青土社。
- 分銅惇作（1984）《国文学解釈と鑑賞》、東京：至文堂、1984年11月号、P80。
- 中野新治（1989）、〈賢治の死生観〉、《国文学解釈と教材の研究 特集 宮沢賢治を読むための研究事典》、学燈社、平成元年12月号、P33。
- 菊田茂男（1993）、〈日本文芸における生と死の構図—直線的継続の関係性と

- 円環的継続の関係性)、岩田靖夫、塚本啓祥編《人間その生と死》、京都：平楽寺書店、1993年12月、P319～334。
- 内田朝雄(1996)、〈書簡に見る賢治の青春後期〉、《国文学解釈と鑑賞》、東京：至文堂、1996年11月、P27。
- 中地文(2000)、〈ひかりの素足— 一郎とは誰か〉、《国文学解釈と鑑賞》、平成12年2月号P48。
- 顧錦芬(2007)、〈童話試論—宮沢賢治の場合〉、《淡江人文社會學刊》第31期、淡江大学、2007年9月、P113—142。
- 杉浦静(2008)、〈ひかりの素足〉、《宮沢賢治の全童話を読む》、東京：学燈社、2008年3月、P148。
- 顧錦芬「宮沢賢治の書簡に見る死生観と生死観」、『淡江日本論叢』第21輯、淡江大学外國語文學院日本語文学系、2010年6月30日、P31～53。
- 木村東吉(2009)、〈「ひかりの素足」考—その未定稿の背景〉、《国文学 解釈と鑑賞》、平成21年6月号、至文堂、P131。

#### 英語図書

Raymond A. Moody, JR (1986) 『Life After Life』, New York: Bantam Books, Inc